課題研究

5 月 25 日（土）13:00～17:15

この内容は「大会プログラム」の課題研究部分を抜粋したものです。

課題研究　5月25日（土）13：00～15：00

課題研究Ⅱ　　教室棟3階 大講義室（本会場）・3-E 教室（サテライト会場）　オンライン併用

研究費ファンディングの国際比較

大学のファンディングに関して現実での様々な動きがある。たとえば、国際卓越研究大学、地域中核・特色ある研究大学強化促進事業など、選択と集中がより強まっている。日本の高等教育ファンディングは他国と比べても特定の大学・大学群への集中度合いが高い傾向があったが、これまでの政策の検証も、他国の政策やその効果検証も十分に行われないまま、こうした政策が次々と展開されている。しかしながら、高等教育研究では近年、ファンディングに関する研究はその重要度に比して、必ずしも十分な研究が蓄積されておらず、こうしたことを批判的・建設的に議論する土台が不十分である。現在、起きている変化にどのような意味があるのか、それが何をもたらすのか、理解し、建設的な議論が行うこと、あわせてこの分野の研究の活性化につながることを期待して、研究費のファンディングの国際比較を2年間のテーマとして設定した。前期の課題研究Ⅰのテーマ「科学技術イノベーション政策と大学・高等教育」の議論を発展させた課題設定で、当該分野の専門家である小林信一会員、齋藤芳子会員の協力を得て進めている。

具体的には、日本および諸外国について、①大学の研究力を向上させるためにどのような特性のプログラム（政策）があり、国としてどのような政策が行われてきたのか、②なぜそのような変化が起きてきた／いるのか、③具体的に各大学にどのように配分され、競争の度合いや集中度はどのようになっているのか、④そうしたファンディングの効果はどのようになっているのかなどを議論していく。

どの国においても、ほぼ共通に、公的研究助成におけるGUF（General University Funds)からDGF(Direct Government Funds)へのシフト、COEタイプのファンディングの模索、政策目的に応じたプロジェクト・ファンディングの拡大と多様化などが起きている。経済安全保障の枠組みの中で、特定の研究領域・目的をトップダウンで強化する動きが進んでいるため、高等教育の政治化は研究費のファンディングの面でも強く表れるし、大学や学問への信頼の低下はこれらの変化をより加速させている。また、研究力が意味する概念自体も広がりを見せつつある。こうした状況を理解したうえで、各国で何が起きているのかについての理解を深めていきたい。

本課題研究では、大会時の報告・議論を深めるために、2023年11月から2024年5月にかけて、4回の勉強会（オンラインでの公開セミナー）を開催しながら進めてきた。そのことを踏まえながら、各国の動向をもとに研究費ファンディングの現状と課題を議論したい。

研究費のファンディングは、研究活動のみならず、大学や高等教育の様々な局面に関わる問題である。その意味で多くの会員にご関心を持って頂きたいと考えている。

（担当理事：両角亜希子・白川優治）

＜当日の内容＞

司会：白川優治（千葉大学）

趣旨説明：両角亜希子（東京大学）

報告：

・ドイツの動向について：竹中亨（大学改革支援・学位授与機構）

・イギリスの動向について：林隆之（政策研究大学院大学）

・韓国の動向について：鄭漢模（北海道大学）

コメント

藤垣裕子（東京大学）

課題研究　5月25日（土）15：15～17：15

課題研究Ⅰ　　教室棟3階 大講義室（本会場）・3-E 教室（サテライト会場）

オンライン併用

学生と大学：ガバナンスへの参加をめぐる過去・現在・将来

＜趣旨＞

本課題研究は、大学の第一のステークホルダーとも言える学生と大学との関係をテーマとして取り上げ、特に、学生による大学ガバナンスへの参加をめぐる過去・現在・将来に焦点を当てた議論を行う。高等教育へのユニバーサルな参加が広がり、同時に少子化による大学の淘汰が現実となるなかで、大学においても学生参画（student engagement）の理念と実践を大学教育の内部質保証のサイクルに組み入れることで、社会の要請に基づく学修者本位の大学教育実現への努力と探求が積み重ねられている。ただし、学生参画を、マクロ（ガバナンスへの参画）、メゾ（質保証・向上プロセスへの参画）、ミクロ（学生個人や他の学生の学習活動への参画）と分けた場合、日本の学生参画の取組は、もっぱらミクロ、メゾのレベルに集中し、マクロ・レベルについては、十分な研究・実践両面での検討が行われてこなかったのではないかと考えた。大学において学生の参加（participation）、参画（engagement）それぞれの実現には、学生と大学のリーダーや教職員との間に、マクロ、メゾ、ミクロそれぞれを貫き、連関させる形でのコミュニケーションが不可欠である。本課題研究では、歴史・国際的な広がりを意識しながら、以下の3名の識者（敬称略）に、学生による大学ガバナンスへの参加をめぐる過去・現在・将来、それぞれの具体的な場を設定した上で、論じていただく。

- 吉見俊哉（國學院大學）：〈劇〉としての「東大紛争：1968－69」
  ――〈闘争劇〉〈祝祭劇〉〈悲劇〉から〈メディア・イベント〉へ
- William Yat Wai Lo (Durham University): Bridging Divides in Crisis Times: Exploring the Dynamics among Student Leaders, Staff Representatives, and University Management in Hong Kong
- 髙橋裕子（津田塾大学）：2025年度入試からのトランスジェンダー学生（性自認による女性）の受験資格を認めるまでのプロセスについて

その上で、田中正弘（筑波大学）に「学生参加をめぐる高等教育研究の現在と将来―学生参加から学生参画へ―」を主題とした論点整理をしていただき、フロアとともに議論を深めていく。

＊本課題研究の企画には、担当理事（米澤彰純、鳥居朋子）の他、杉谷祐美子、田中正弘、清水栄子が参加している。

＊本企画は、Zoomウェビナーでも配信をいたします。日本語の同時通訳音声をご希望の方は、サテライト会場においてアクセス可能なWi-Fiをご用意しますので、各自イヤホンをご用意の上、ご自身のスマートフォン・PC等からお聞きください。